

山形大学工学系留学生を対象にした生活時間調査報告

A report on the day-to-day lifestyle of non-Japanese students at the faculty of engineering and graduate school of engineering in Yamagata University

仁科浩美¹

NISHINA Hiromi

Abstract

This paper investigates the day-to-day lifestyle of non-Japanese students at the faculty of engineering and graduate school of engineering in Yamagata University. The survey involved filling out a time table covering 1 week about a range of activities, the people they had contact with and the language they used. The results showed that the number of hours non-Japanese students spend sleeping was comparable to that of Japanese students. Non-Japanese students spend time doing experiments or at seminars mostly from 15:00 with a peak time of 18:00. This shows that special events concerning the support or education for the students should not take place during that time. Regarding the people non-Japanese students have contact with, the contact network is small for most and contact is mainly with people on campus. 39.5% of students have a day or more a week then they do not talk to anyone at all. Although Japanese is basically the language used among non-Japanese students at the university, those who live with their family have a tendency to spend more time communicating in their mother tongue than in Japanese.

キーワード：生活時間、生活行動、行為者率、時間帯、接触者、使用言語

1. はじめに

留学生受け入れ10万人計画が達成された今日、新たな留学生増員に関する政策が発表されている。それに伴い、これまでの留学生に対する日本語教育はもちろんのこと、キャンパスライフや就職に関する指導など、これまで以上に留学生に対する指導・教育の必要性は高まっている。

効果的な指導・教育を行うためには、留学生の生活行動を的確に把握するとともに、それを踏まえた上で留学生が参加しやすい時間に支援活動を実施することが重要である。つまり、専門の研究活動を阻害しない状況での指導・教育が求められるのである。しかしながら、これまでは漠然と担当者の経験からとらえられているだけで、調査・分析まではさ

¹ 山形大学国際センター准教授

れていないのが実情である。

留学生の実態に関する調査は、さまざまな機関で行われており（京都大学国際交流センター2006、渡辺2005等）、最近では、独立行政法人日本学生支援機構（2006）が全国規模で生活状況の把握を目的に実施したもの等があるが、そのほとんどが意識調査を主としたものである。また、日本語教育からの観点からは言語使用に関する実態調査も数多く行われており（村上1998、仁科（喜）・武田1991等）、本工学部における使用の実態については仁科（浩）（1997）が報告している。

さらに、留学生に限定することなく、いくつかの大学では学生を対象に生活実態調査と称する質問紙調査が行われている。本大学でも2005年に学生生活委員会が『学生生活実態調査報告書』を発行した。しかし、これは学部生のみを対象にしたものであることと、意識調査の要素も多分にあるため、大学院生が半数を占める工学部の留学生の動向把握にはそのまま使用することはできない。

そこで、本調査では、生活の様子を時間の面から具体的にとらえた基本データを収集し、今後の留学生教育・指導に生かしたいと考える。工学部に特化する理由は、本大学の留学生の約半数が工学部・理工学研究科のある米沢キャンパスに在籍していること、また、工学部の実態は文系出身が多いと思われる日本語教育担当者にとっては未開拓分野であり、生活の様子そのものを具体的に、実証的に知る必要があるからである。

2. 調査の概要

2.1. 調査の目的

1日24時間を単位とした1週間の留学生の生活を時間の面から把握することにより、工学部における留学生生活の基本データを得るとともに、留学生に関する指導・教育を効果的に実施する時間帯を把握することを目的とする。さらに、行動の際の使用言語・言語を交わす相手を知ることにより、留学生が置かれているコミュニケーション環境を把握したいと考える。

2.2. 調査事項

1週間にわたる行動内容とその時間帯、およびその際の使用言語・接触する相手について調査した。行動については、留学生が行うと想像される行動を33リストアップした（資料1）。また、個人の属性に関する質問として、調査対象者の性、専攻、課程と学年を尋ねた。

2.3. 調査方法

NHK国民生活時間調査（2005）を参考に調査票を作成した（資料2）。配付は留学生に調査者である筆者が直接、または、事務職員を通して配付し、1週間後に指定回収先に提出する方式で行った（配付回収法）。記入方法は以下のとおりである。

（1）調査対象者本人が時刻メモリ日記式調査票に1週間の生活行動を記入する。

NHKの調査票では、午前・午後1枚ずつが用意されているが、この方法だと1週

- 間分調べるのに、14枚の用紙への記入を依頼せねばならず、対象者にとっては作業が煩雑となるため、本調査では1週間分を1枚にまとめて記入できる票を作成した。
- (2) 行動についてはあらかじめ行動リストを用意し(資料1)、調査対象者は該当する行動をリストより選ぶ。該当になれば「その他」とし、具体的に行動内容を記入する。
- (3) 行動時に、行動をともにした者がいた場合には、その人について関係を記入する。言葉を交わした際にその人が日本人であったか、日本人でなかったかも記入するのが望ましかったが、作業の煩雑さを避けるため、今回は単に「先生」「友人」という表現にとどめた。
- (4) 行動時、「書く」・「話す」の言語産出あるいは「聞く」・「読む」の言語受容を必要とした場合は、その言語名を記入する。なお、不明な点や記入漏れについては、後日、本人に確認した。

2.4. 調査期間・調査対象日

2007年5月21日(月)～5月27日(日)の1週間を調査対象日とした。この時期に調査を実施した理由は、この時期が前期における中間地点であり、4月からの授業が定着し、軌道に乗った頃の時期と思われ、日常の様子を把握するのに適当と考えたからである。しかし、1年を通して考えれば、テスト時期、卒業論文作成時期等、学業の周期といったものがあり、今回の生活パターンとは異なる行動をとることは容易に想像でき、1年の流れを把握するためには時期ごとに、あるいは、定期的に調査を行う必要があるだろう。

2.5. 調査対象者

山形大学は山形県3都市に4つのキャンパスが分散する大学で、工学部のある米沢キャンパスには学部2年生から博士課程後期の学生が在籍しており、その割合は山形大学留学生数の約半数を占める。本調査では、2007年5月の時点で山形大学工学部および理工学研

表1 課程別調査対象者と回収率

	調査対象者数 (名)	有効サンプル数 (名)	回収率 (%)
博士課程 (D)	25	20	80.0
内訳	D1 8 D2 11 D3 6	D1 7 D2 9 D3 4	
修士課程 (M)	11	9	81.8
内訳	M1 7 M2 4	M1 6 M2 3	
学部生 (B)	25	6	24.0
内訳	B2 7 B3 8 B4 10	B2 2 B3 3 B4 1	
研究生・特別聴講生 (R)	3	3	100.0
計	64	38	59.4

表2 専攻別回答者数と構成比

専攻	人数 (人)	構成比 (%)	人数内訳			
			D	M	B	R
情報科学	10	26.3	5	4	0	1
機械システム工学	8	21.1	4	2	1	1
物質化学工学	5	13.2	3	1	1	0
生体センシング機能工学	5	13.2	5	0	—	0
機能高分子工学	4	10.5	2	0	2	0
電気電子工学	3	7.9	0	1	2	0
応用生命システム工学	2	5.3	1	0	0	1
ものづくり技術経営学	1	2.6	0	1	—	0
計	38	100.0	20	9	6	3

(D：博士課程 M：修士課程 B：学部生 R：研究生等、
D1：博士課程1年生 —：学部生を対象としない専攻)

究科(工)に在籍する学部および大学院の留学生を対象とした²。調査有効サンプル実数は、表1に示すとおり、学部生6名、博士課程前期(以後、修士課程とする)(M)9名、博士課程後期(以後、博士課程とする)(D)20名、研究生および特別聴講生3名の計38名であった。性別は女性17名(44.7%)、男性21名(55.3%)である。課程別調査対象者の回収率は、学部生が24%と低く、今回は参考値として扱わざるを得ないが、修士課程・博士課程の留学生については80%強と多くの学生の協力が得られた。なお、学部1年生は、工学部のあるキャンパスとは離れた別キャンパスで授業を受けているため、今回は対象外とした。専攻ごとの構成比は表2のとおりである³。

2.6. 行動分類

記入は調査対象者が行動リストの中から行動を選択し、その番号を書く方式で調査を行った。行動は、身じたく等の誰もが行う行動、大学で行う行動、個人の自由で私的に行う行動、その他、休養・アルバイト・睡眠等に大きく分類し、それらの下位項目として具体的行動を示した。詳細は資料1を参照されたい。

3. 結果と考察

3.1. 睡眠と起床

一日のうちで最も長時間にわたる行動で、かつ、必需である行動は睡眠であろう。健康的な生活ができているかどうかを推察する意味からも睡眠のとり方と睡眠時間についてデータをまとめた。

図1に平日における課程別の睡眠状況を示す。行為者率とは、全体の中でその行動を行っている者の割合を示す。就寝行為者が50%を超える時間を見ると、研究生が11時と最も早

² 休学中の者、一時帰国中の者等この時期に大学に通学していないは対象外とした。また、博士課程20名のうち、1名はこの期間他機関に赴いて研究活動を行っており、そこでの活動を報告した。

³ 学部と修士課程・博士課程の専攻の分類については、課程により統合・分化が見られるが、本調査では研究室の指導教員の所属をもとに専攻を分類した。

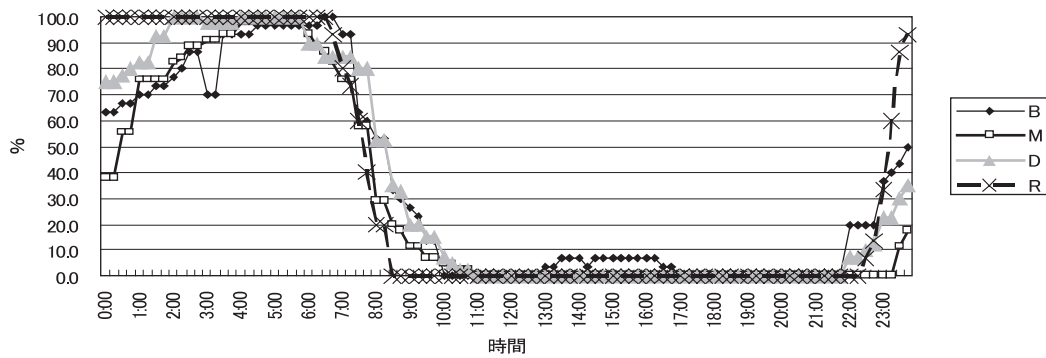


図1 課程別睡眠の行為者率 (平日)

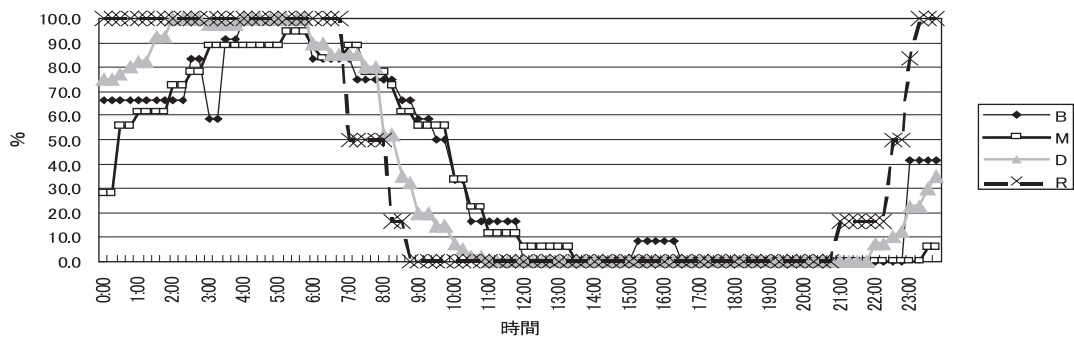


図2 課程別睡眠の行為者率 (週末)

い。最も遅いのは、修士課程の学生であり、就寝率が50%を超えるのは夜中1時近くであることがわかる。この時間帯の修士課程の学生の行動は、「e-mail・電話・インターネット使用」、「テレビ」、「音楽」等であり、私的なくつろぎの時間として使用している様子が窺える。また、起床時間についてみると、50%以上の者が起床する時間は、どの課程の学生でも8時すぎであることがわかる。やや遅いとも感じられるが、これは本キャンパスに通学する学生のほとんどが市内に居住し、通学の時間も20分以内と短くて済むためと考えられる。

図2は週末の睡眠の様子を示したものである。就寝時間は、研究生・学部生は平日より早い、大学院生は平日とほぼ同じである。行為者が50%を超える起床時間を平日と比較すると、研究生・博士課程の学生では大きな差はないが、学部生と修士の学生では平日より2時間程度遅いことがわかる。

課程別の平均睡眠時間を表3に示す。研究生・学部生の平均睡眠時間は平日で8時間強、次いで博士課程、修士課程の学生の順になる。修士の学生の睡眠時間がやや少ない傾向にあるが、その分週末は平日より1時間12分の増となり、最も週末の睡眠時間の伸びは大きい。NHK(2005)が行った調査と比較すると、留学生全体の数値としては、概ね日本人学生と大きな差は見られず、平均的な睡眠時間をとっていると言えよう。

表3 課程別平均睡眠時間

	平日	週末	週末—平日
B	8時間05分	8時間38分	+ 33分
M	6時間57分	8時間15分	+ 1時間12分
D	7時間32分	8時間27分	+ 55分
R	8時間27分	9時間15分	+ 48分
全体	7時間32分	8時間25分	+ 52分
NHK調査 (学生) ⁴	7時間44分	8時間53分	+ 1時間09分

3.2. 勉学と研究

(1) 実験

いわゆる文系の学部と工学部が大きく異なる点は実験による拘束時間があることだろう。すべての専攻で実験があるわけではないが、回答者38名のうち26名（行為率68.4%）が実験を行っている。特に博士課程の学生の行為率は博士課程20名中17名（85.0%）とその値は高い。

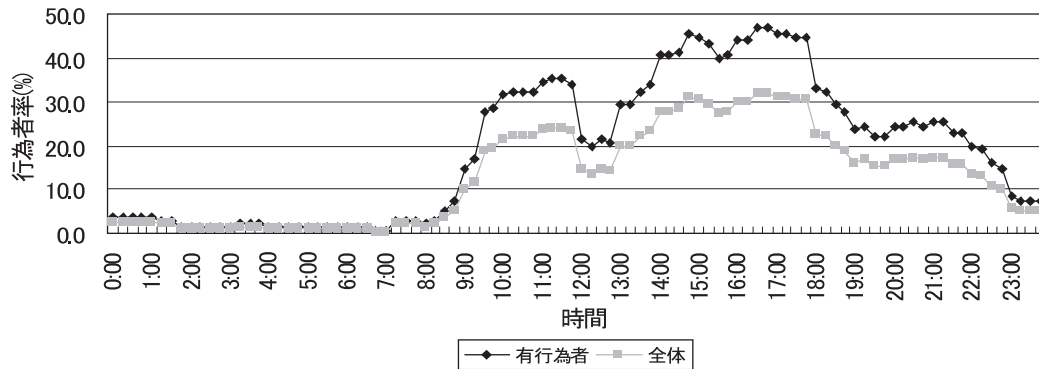


図3 実験行動の時間（平日平均）

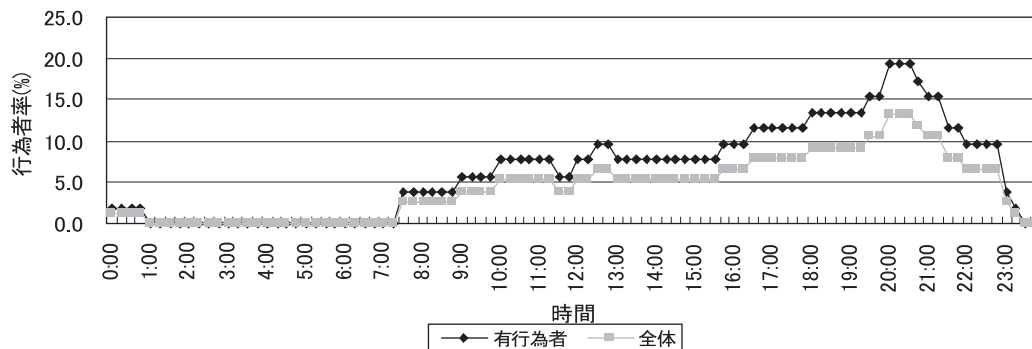


図4 実験行動の時間（週末平均）

⁴ NHK調査における「学生」には、小学生・中学生・高校生・大学(院)生・専修学校生・各種学校生が含まれている。

図3は平日の実験を行った行為者率を示したものである。◆の折れ線は実験を行った行為者中での割合を、■は全体数での割合を示している。最も実験に携わる者が多い時間帯は、午後2時から6時頃までであることがわかる。また、夜11時を過ぎると実験を行う者の数は急激に減少するものの、午前1時ごろまでは3%程度の行為者がおり、ゼロではない。今回実施した時期は5月であるため、このような数字になったが、卒業論文や修士論文作成が近づく時期にはさらに深夜の数字が上がる事が予想される。

一方、週末は実験を行う割合は20%弱まで減るものの、実験を行う時間帯としては20時から22時ごろまで実験を行う者が多く（図4）、学生の課程については1名（修士課程）を除き、博士課程の学生であった。これまで博士課程の学生からは「日曜も休みも関係ない」という話をよく耳にするが、睡眠時間の図と併せて考えれば、実験を行う博士課程の学生は平日・週末の区別なく取り組んでいる様子が数字からもうかがうことができる。

次に、表4に1週間あたりの実験行動日数を示す。最も多かったのは、月～金の平日のみに実験を行う者で、実験を行う者の25%がこのパターンであった。これにより、平日と週末の過ごし方に変化を持って過ごしている様子がうかがえる。次に多かったのは平日に1日実験を行う者で、週に3日がそれに続く。平日・週末を問わず、実験を行うものも4名（16.7%）おり、数字からは、①連日休みなしで実験、②平日のみ毎日実験、③週の半分程度実験、④週に1回程度の4つのパターンが見られた。

図5は1回あたりの実験時間を示したものである。中には半日以上も必要とする実験も

表4 1週間あたりの実験行動日数

回数／週	内訳：平日・週末	人数	%
7	5・2	4	16.7
6	5・1	2	8.3
6	4・2	0	0.0
5	5・0	6	25.0
5	4・1	0	0.0
5	3・2	0	0.0
4	4・0	1	4.2
4	3・1	1	4.2
4	2・2	0	0.0
3	3・0	4	16.7
3	2・1	0	0.0
3	1・2	0	0.0
2	2・0	2	8.3
2	1・1	0	0.0
2	0・2	1	4.2
1	1・0	5	20.8
1	0・1	0	0.0

(%は有実験者中の割合を示す。)

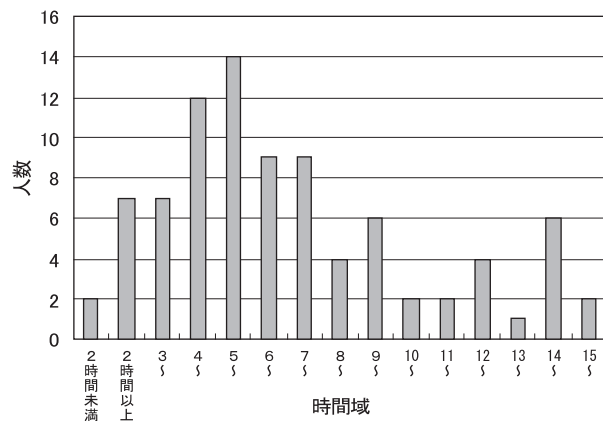


図5 1回あたりの実験時間

あるが、4時間以上5時間未満、5時間以上6時間未満がそれぞれ12名、14名と数は多い。食事等で中断することを避けたい場合等は、午後の実験を開始するという方法が考えられ、そのことは図3からも見てとれる。

(2) ゼミ・輪講・報告会

学生として参加が必須のもう一つの活動は、研究室の構成員が全員集まってのゼミや報告会であろう。表5は週当たりのゼミ等に参加回数を示したものである。全体の60.5%にあたる23人がゼミ等に出たことを記載している。その頻度は、週1回ゼミに出たとする者が最も多く5割以上を占めている。週2回参加したとする回答者と合わせると約9割を超え、通常は1回、多くて2回の実施と言える。

表5 週あたりのゼミ・輪講・報告会の回数

回数	人数	%
週1	13	56.5
週2	8	34.8
週3	2	8.7
計	23	100.0

ゼミ・輪講・報告会に参加する時間帯は、午前中の10:30~12:00にも見られるものの、やはり午後のほうが割合は高く、特に、16時から17時の夕方の時間が最も多い(図6)。実験の時間と比べるとやや遅い時間に行われていることがわかる。また、その平均開催時間は2時間03分であった。

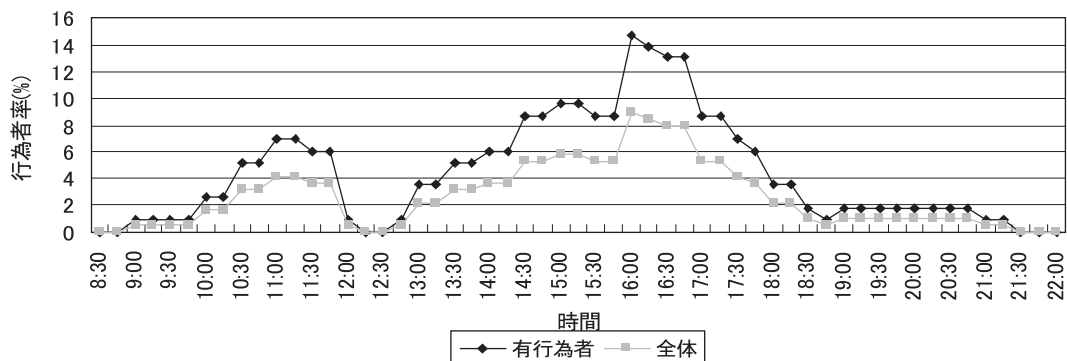


図6 ゼミ・輪講・報告会の平均行為者率

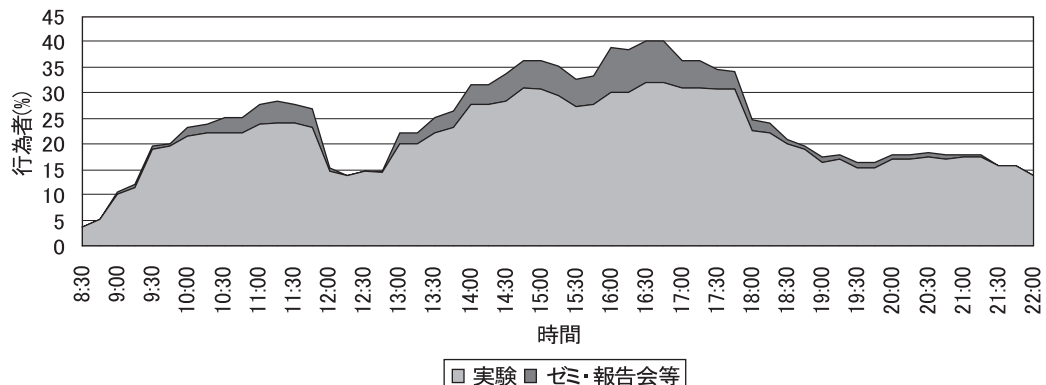


図7 実験と、ゼミ・報告会等の留学生全体に占める行為者率

実験やゼミ等の活動は、学生の参加が義務である。その意味で、これらの行動は拘束行動と言える。これら実験とゼミ等の2つの行動を合わせた行為者の割合を示したものが図7である。この図から15時～18時は実験・ゼミ等が行われることが多い時間帯で、学生にとっては研究室を抜けにくい拘束時間となっていることがわかった。通常、学部の授業は16時で終了するので、学部生に必要な留学生指導はその後に行うことが可能と考えられるが、院生の場合は18時頃まで自由に時間を使えない者が多いという結果から留学生指導は課程別に行う必要性も考えられる。

(3) 教員による専門に関する個人指導

回答者38名のうち、研究室に配属になっている学部4年生以上の33名を対象に考える。33名のうち、教員に専門について指導を受けているのは、12名(36.4%)で、7割近い学生が週1回専門に関し、個人指導を受けている(表6)。しかしながら、残りの6割を超える学生は、特に専門について個人的に指導を請うことはしていない。これについては、留学生からは「指導教員はいつも忙しそうだ」という声を聞く。また、逆に教員からは「留学生はあまり質問に来ない」といった声も聞かれ、二者間には微妙な心理的ずれが見られる。教員からすれば留学生は研究室に在籍する一学生にすぎないため、留学生としては自ら自分の様子を教員に把握しておいてもらえるよう、積極的な接触を持つよう心がけることが必要だろう。この実態を踏まえ、教員との接触到消極的な留学生に教員の部屋のドアをたたくよう促すのも国際センター教員のようなセカンドアドバイザー的立場にいるものの重要な仕事である。

表7は1回あたりの指導時間を示したものである。最も多いのは1時間未満である。この場合の具体的な行為としては不明な点や疑問に思うところを教員に尋ねるといったことが推察される。これに対し、長時間の指導を要するものは、実験や理論・論文指導といった活動が考えられ、学生に付き添って指導する姿が想像される。表6で週5回指導を受けている留学生は、博士課程3年の学生で、修了時期が迫っている学生であった。表7において長時間の指導を受けているのもこの学生であったが、長時間にわたり教員がつきっきりで指導してい

表6 1週間に教員に指導を受ける回数

回数	人数	%
週1	8	66.7
週2	1	8.3
週3	2	16.7
週4	0	0.0
週5	1	8.3
計	12	100.0

表7 専門についての個人指導

1回あたりの指導時間	件数
1時間未満	6
2時間以上3時間未満	5
3～4	1
4～5	2
5～6	0
6～7	3
7～8	1
8時間以上	3
計	21

たというよりは、不明な点があったときに必要に応じて指導をしてもらうという状況であると判断するのが適切であろう。接触の密度が測れない点がこの表の欠点である。

(4) 専門についての自学自習

図8に専門についての自学自習時間を示す。1時間刻みでのスケールでは、平日・週末ともに自習時間ゼロが最も多いものの、平日については1時間以上2時間未満、3時間以上4時間未満、4時間以上5時間未満の学習を行っている者が多く、平均時間は2時間54分と約3時間の自学自習時間となる。週末は1/3強の者は学習時間がゼロであるが、全体平均は2時間03分となっている。なお、今回の調査では平日・週末ともに課程による差は見られなかった。

3.3. 余暇

余暇をどのように過ごしているのかを表8に示す。これは、調査対象者が記入した表のメモリの最小単位である15分を最低時間とし、15分以上その行為を行った者の平日、週末それぞれの平均の割合である。

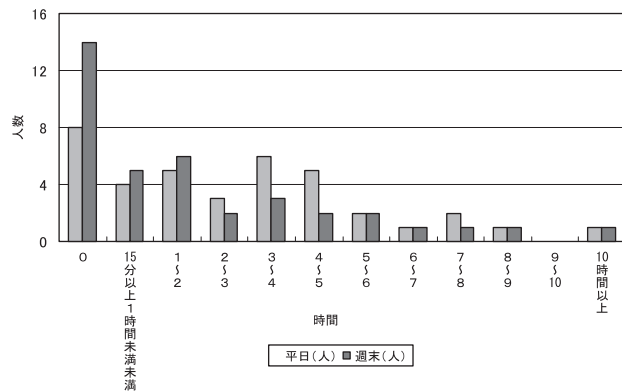


図8 専門についての平均自学自習時間

表8 余暇に関する平均行為者率

	平日 (%)	週末 (%)
テレビ	55.8	52.6
e-mail、ネット電話	17.9	26.3
音楽	15.3	15.8
ビデオ・DVD	12.6	19.7
新聞・本	8.4	11.8
遊ぶ・雑談	7.9	21.1
雑誌・マンガ	7.4	7.9
スポーツ	4.7	9.2
趣味	4.2	9.2
行楽地へ・散歩	0.5	19.7

平日・週末とも最も多いのは、テレビ視聴である。これは最も手軽に、かつ生活に密着したメディアであるからであろう。しかし、その視聴行為には、食事や家事などをしながらという「ながら族」が多い。平日は、時間に余裕がないためか、インドアの部屋の中でできる行為が上位をほとんど占めている。週末についても全体的にはインドア派が多いように思われるがスポーツや外へ出かける者は急激に増加する。「週末しか動ける時間がないから」というのが最も大きな理由と予想できるが、20代・30代の年齢がほとんどを占める留学生の心身の健康を保つためにも外へ行動範囲を広げることが必要な行為と言える。加えて、平日に比べ増加率が大きいのは、「遊ぶ・雑談」である。接触者は前述したように母語が同じ友人が多いが、友人と過ごし、語る・遊ぶといった行為を通して日頃のストレスを解消しているものと思われる。

表11 母語だけで過ごす日の有無

接触時、母語だけで 過ごす日	人数	曜 日
ある	21	
{ 内訳： 1日 2日	12	(土5、日5、月1、木1)
	9	(土・日7、土・月1、土・木1)
ない	16	
無記入	1	
計	38	

37名が1週間に教員と接触したのは、132件であった。そのうち、日本語が使われなかったのは3件のみであった。3件のうち、2件は初級日本語もまだ習得できていない学生であり、やむをえないケースである。日本語と他の言語が両方同時に用いられるケースは132件中12件であった。この場合、教員とともに友人がそばにいて実験を行っている場合が10件あった。これらのことから、同じ国からの留学生と回答者、教員がいる場合には3者間では日本語が使用されるものの、留学生同士の内容確認や情報伝達等には母語が使われている様子がうかがわれる。同じ実験を行う場合でも、回答者との2名による60件の場合では、4年生や後輩には日本語で接するが、日本語と母語との混在が10件、母語のみのケースが2件見られ、この場合は同じ言語を話す学生が相手と判断され、相手・状況に応じて、使い分けているようである。

日本語を話さずに、他の言語（主に母語）で過ごす日の有無について調べると、その日が1日ある者は、37人中12人、2日ある者は9名であり、そのほとんどが週末に集中している（表11）。その際の接触者は友人、家族となっており、プライベートな活動を楽しんでいることがわかる。接触者と母語がよく使われるのは、「食事をする」、「テレビを見る」、「スポーツをする」、「買い物をする」といった時間である。これらのことからプライベートな時間の多い週末は日本人とよりも同じ言葉話す人間と交流を行っている様子がわかる。また、その一方では、3-4から日曜日などは接触者がいない場合も多いことが判明し、週末は比較的狭い範囲での人間関係で過ごしていることがわかる。

単身者で勉学しているときには、日本語力に関して非常に伸びが良いにもかかわらず、家族とともに生活を始めるとその伸びが思わしくなくなる場合を筆者はこれまで何度か経験してきた。家族と母語を使う頻度や時間が増えるからとの原因が考えられるが、この点について、家族と同居すると日本語の割合が減るのかどうかを調べた。①日本語のみでの接触時間、②母語のみでの接触時間、③日本語と母語を混在させての接触時間、④そのほかの言語による接触時間に分け、分析した。ただし、本調査では、行動に付随して接触者と何語で話すかを記録してもらったため、ここで示す時間はその行動中絶え間なく発話しているという意味ではなく、会話を交わす環境にいたという意味である。有効回答者数37名のうち、接触者に妻、夫、子等の家族を明記したのは9名をAグループ、それ以外の28名をBグループとして分析する。A、Bそれぞれのグループについて、上記①～④のうち母語を最も長い時間使用するものは、Aグループは55.6%であったのに対し、Bでは20.7%であった。Aグループについて詳しく示したのが表12である。セルに色がついてい

表12 1週間における接触者との使用言語時間

Aグループ

サンプルNo.	日本語	母 語	日本語・母語	その他	計
4	23時間30分	5時間45分	0	0	29時間15分
●8	25時間45分	23時間45分	0	0時間15分	54時間30分
		4時間45分			
●10	11時間45分	37時間30分	3時間0分	0	52時間15分
●16	21時間0分	27時間45分	2時間0分		51時間45分
		1時間0分			
20	34時間0分	3時間45分	0時間15分	0	38時間0分
●21	6時間45分	21時間45分	26時間30分	0	58時間30分
		2時間0分	1時間30分		
24	27時間45分	45分	26時間45分	0	55時間15分
31	6時間45分	6時間0分		5時間45分	18時間30分
●35	2時間0分	12時間30分	5時間30分		24時間45分
			17時間15分		
平均 (%)	17時間42分 41.6	5時間59分 14.0	8時間17分 19.5	0時間45分 1.8	42時間30分 100.0

Bグループ参考値

平均 (%)	23時間11分 68.7	6時間17分 18.6	2時間25分 7.2	1時間17分 3.8	33時間29分 100.0
-----------	-----------------	----------------	---------------	---------------	------------------

●：母語による時間が日本語より長かったケース、色つき下地は家族との言語使用時間を示す。

る箇所は、家族との接触時間である。●がついているのは、母語と日本語での使用時間を比べた場合、母語のほうが長かったケースである。言語使用時間平均は、Aグループのほうが約9時間多く、周囲に家族がいることでコミュニケーションが頻繁に起こっていることがわかる。また、日本語の使用割合については、やはりBグループのほうが日本語の割合が7割近くあり、Aグループとは大きな差がある。しかし、母語のみの使用についてはむしろBグループのほうが若干多く、Aグループの特徴は母語のみの使用よりも日・母の混合での使用にあることがわかった。混在の様子がどの程度であるかは、今回、測ることができないが、簡単な単語だけを日本語に置き換えているような使用であれば、日本語力の向上にはつながらない可能性もある。

4. まとめ

本調査は、留学生の行動の様子を具体的に把握し、今後の日本語授業や留学生生活指導に役立てることを目的として、1週間の行動・接触者・使用言語を調査した。その結果、睡眠時間は日本人学生のデータと比較しても大きな差はみられず、平均的な睡眠時間を確保できていることがわかった。実験やゼミ等の研究活動として必須な活動は、午後2時ごろから夕方にかけてなされることが多いことが判明し、これにより、留学生に対する指導・

教育を行う場合にはこの時間帯を避けるべきであることがわかった。また、接触者はほとんどが学内関係者か母語が同じ者と交わしており、あまり交際範囲は広くないようである。使用言語に関するデータからは、単身での来日者は日本語中心で過ごす時間が多いのに対し、家族とともに生活する者は日本語使用の割合が低く、日本語習得にも少なからず影響を与えている可能性が見られた。今回の調査は1枚の紙に多くの情報を記入することになり、回答者にとってはやや負担の大きい作業となった。そのためか、学部の学生からの回収率は低かった。今後はこれらの点を改善し、より正確な情報が得られるよう工夫したい。

謝辞

本調査にご協力くださった留学生の皆様へ心より感謝申し上げます。

参考文献

- NHK放送文化研究所（2005）『2005年国民生活時間調査報告書』
- 京都大学国際交流センター（2006）『京都大学における国際交流の現状と可能性－第2回アンケート調査報告書』
- 独立行政法人日本学生支援機構（2006）『平成17年度私費外国人留学生生活実態調査概要』
- 仁科喜久子・武田明子（1991）「理工系大学における外国人留学生の日本語能力に関する調査分析－東京工業大学大学院課程を中心に－」『日本語教育』75: 113-123.
- 仁科浩美（1997）「工学部における留学生の日本語使用の実態」『山形大学日本語教育論集』第1号: 85-96.
- 村上京子（1998）「質問紙調査による結果の概要」『研究留学生に見られる日本語発話能力の変化と日本語使用環境に関する基礎的研究』（科学研究費補助金研究成果報告書：研究課題番号07458049）尾崎明人（名古屋大学留学生センター）: 67-75.
- 山形大学（2005）『学生生活実態調査報告書新しい時代の大学で充実した学生生活を送るために』
- 渡辺淳一（2005）「山口大学留学生の生活実態調査－現状の分析と課題－」『大学教育』（2）: 67-84.

資料1

例)

2007/5/21 (月)			
	A. No.	B. 誰と	C. 何語
0:00			
30	↑ 32	0	0
1:00			
30			
2:00			
30			
3:00			
30			
4:00			
30			
5:00			
30			
6:00			
30			
7:00			
30	↓ 1	0	0
8:00	↑ 15・3	0	日
30	↓		
9:00	↑ 22	友だち	中
30	↓ 5	0	0
10:00	↑ 9	先生	日・英
30			
11:00			
30			
12:00			
30	↑ 3	友だち	中
	↓ 35 (銀行へ)	0	日
13:00	↑		

【記入の仕方】

A. No.は下の表「行動リスト」から選んで番号を書いてください。

① 2つ一緒にしたときは、「○・○」のように書いてください。

例：「テレビを見ながら、ご飯を食べた」…「15・3」

② この表にないときには、「その他 33」を選んで、具体的な内容を書いてください。例) 33 (銀行へ行く)

③ した時間帯を⇄で示してください。

行動リスト

	行 動	No.
身じたく	起きる	1
	洗面・入浴・着替え等	2
	食事	3
	その他 ()	4
大学で	通学・通勤	5
	専門の授業を受ける	6
	ゼミ・輪講・報告会	7
	実験	8
	専門について個人指導を受ける	9
	専門について自分で勉強	10
	日本語の授業を受ける	11
	日本語について自分で勉強	12
	e-mail・電話・インターネットを使用	13
	その他 ()	14
private	テレビを見る	15
	新聞・本を読む	16
	雑誌・マンガを読む	17
	音楽を聞く	18
	ビデオ・DVDを見る	19
	遊ぶ・雑談をする	20
	e-mail・電話・インターネットを使用	21
	スポーツをする	22
	行楽地へ出かける・散歩する	23
	趣味の時間	24
	掃除・洗濯・炊事などの家事	25
	買い物	26
	勉強・宿題・レポート	27
その他	28	
休養・静養	休憩をする	29
	病院へ行く	30
	その他 ()	31
アルバイト	アルバイト	32
睡眠	寝る	33
その他	()	34

B. 「誰と」は誰かと一緒のときに書いてください。

例) 日本人の友だち、先生、中国人の先輩一人のときは、「0」と書いてください。

C. 「何語」は、見る・聞く・話す・読むのに使った(必要とした)言語を書いてください。

書き方：中国語…「中」、英語…「英」、日本語…「日」、日本語と中国語…「日・中」言語がないときは、「0」と書いてください。

資料2

◆1週間の言語行動生活調査表

	2007/5/21(月)			2007/5/22(火)			2007/5/23(水)			2007/5/24(木)			2007/5/25(金)			2007/5/26(土)			2007/5/27(日)				
	No.	誰と	何語	No.	誰と	何語	No.	誰と	何語	No.	誰と	何語	No.	誰と	何語	No.	誰と	何語	No.	誰と	何語		
	0:00																					0:00	
	30																						30
	1:00																						1:00
	30																						30
	2:00																						2:00
	30																						30
	3:00																						3:00
	30																						30
	4:00																						4:00
	30																						30
午	5:00																						5:00
	30																						30
	6:00																						6:00
	30																						30
	7:00																						7:00
	30																						30
前	8:00																						8:00
	30																						30
	9:00																						9:00
	30																						30
	10:00																						10:00
	30																						30
	11:00																						11:00
	30																						30
	12:00																						12:00
	30																						30
	13:00																						13:00
	30																						30
	14:00																						14:00
	30																						30
	15:00																						15:00
	30																						30
	16:00																						16:00
	30																						30
午	17:00																						17:00
	30																						30
	18:00																						18:00
	30																						30
	19:00																						19:00
	30																						30
	20:00																						20:00
	30																						30
	21:00																						21:00
	30																						30
	22:00																						22:00
	30																						30
	23:00																						23:00
	30																						30